

「これからの建築」

伊東豊雄／古谷誠章／辺見美津男

@万代中央埠頭 アクアチッタ

JIA 四国支部大会 2015 TOKUSHIMA

### 今日までの経緯

内野：どうぞよろしくお願いいたします。  
まずは今日のこの場の雰囲気というか設え  
というか、このつくり、みなさん「なんな  
これ？」と思われる方が多いかと思いま  
すけれども、トークセッションの前に、  
こういう設営に至った経緯を、当大会の  
大会実行委員長であります JIA 徳島地域  
会前会長の伊月善彦からひとこと、話して  
もらおうとおもいます。

伊月：今日は先生方ありがとうございます。  
こういう会場にどうしてなったか、とい  
うのはまず、「あの日からの建築」という  
題でこの大会をやろうというのは最初か  
ら決まっております、そのときに伊東先  
生にお越しいただく、というところがス  
タートでした。あの日からというのは3.  
11、すべてを失ってから、どういう風  
に立ち直っていくのかというところに焦  
点をあてるべきかなと、思ったのでま  
ず、徳島のちょうどいい倉庫、ここア  
クアチッタでやろうというのをみんな  
で話し合っただけで決めました。

通常こういう大会というのはホテルと  
かでやったりすることが多くて、そう  
すると非常に楽なんですけども、こう  
いう場所でやると、見た目は楽なんです  
けども、たくさんのメンバーの汗が流  
れた結果としてこの状況が生まれてい  
るわけで、そういう部分が僕達にとつ  
ても非常に良かったなと思います。で、  
今日、今四人の方が座られている

椅子もですね、これからの建築という  
ことで、メンバーが図面を引いて木を  
切り出して、自分たちで作ったものに  
座ってもらおうと、元のデザインはイ  
タリアのデザイナーエンツォ・マリ  
が、素人の人でも作れる家具、とい  
うことで考えられたんですけれども、  
それを使わせていただきました。イ  
タリア仕様で多少座面が高くてすわり  
心地も悪いんですけども、まあ1時間  
ほど、みんなの汗を吸っている椅子  
でございますので、1時間、がんばっ  
て頂けたらと思います。よろしくお  
願いいたします！（拍手）



内野：はい、伊月さんどうもありがとう  
ございました。それでは本当に簡単に、  
壇上の皆様のご紹介をさせていただきます。  
先ほどご講演いただきました伊東豊雄  
先生です。よろしくお願いいたします。そ  
れから、今年から始まりました J I A  
四国建築賞の審査委員長をお努めい  
ただきました、古谷誠章先生です。そ  
して私の隣にいらっしゃるのが、J I  
A 東北支部の支部長であり J I A  
副会長でもある辺見美津男さんです。  
よろしくお願いいたします。

辺見さんとはですね、今日受付でお配  
りした A 3 のコピーがお手元にあると思  
うんですけども、3. 11 以降の徳島  
でのいろんな取り組みの、仮設住宅の  
試行ですと

か、確実に助かる命を助けるための先行高地移転試行ですとか、そういったことの一部がとりあげられています。3. 11の直後に東北のほうに参りまして、辺見さんとお会いして、辺見さんは当時福島地域会長だったんですが、不幸にも被災してしまった福島と、未被災地である徳島、同じ島同士、フクシマトクシマの会というのをその場で結成しまして、われわれは今後、どういったことをしておけばいいのかということを考えますし、福島のほうではどういうふうに立ち直っていくのかというようなことを情報交換しようということで、そういう会が始まりました。辺見さんが徳島に来てくださったり、私たちが福島へ行ったりというようなやり取りの中でアドバイスをたくさんいただきながらやってきた仕事のこれが証でもあると、いうことです。

今日のトークセッションなんですけども、3. 11以来の皆様方の取り組みの話を始めると全然時間が足りなくなりますので、先ほどの伊東先生のお話のあの日からの建築という中で、きょう今からお話したいのは、まさにこれからの建築ということです。われわれ設計者、建築士、建築設計士、建築家でありますけれども、これからはずっと一生建築にかかわっていく中で、これからというものを今日、時間は短いですけれども、なにかこうみつけて、それぞれに形は違うでしょうけれども、もって帰って頂くことができたらすばらしいなと思います。建築士ということに限らず、われわれは設計者でありますけれども同時に市民でもあります。あたりまえですけども。市民としてということと、人間としてということ、建築設計者として、いろいろあると思いま

すけれども、何かこう持ち帰っていただけたらというふうに思います。よろしく願いいたします。最初のきっかけを辺見副会長のほうからお話いただけたらと思います。

#### 正しく絶望する（フクシマから）

辺見：伊東さん古谷さんと一緒にトークセッションなんていう立場ではまったくないので、今ご紹介いただきましたように、フクシマトクシマの会を通して何度かこちらにお邪魔させていただいております、その縁で今回お招きをいただきました。

私は最近「せっかく」という言葉をよく使うんですけれども、「せっかく」起きてしまったことをきちんと伝えて次の備えの参考にしていただきたいという思いで、フクシマトクシマの関係を継続させていただいております。今日、伊東先生のお話のなかで「被災地を訪れてから考え方が変わった」というお話がありましたが、そのあたりと関連するお話ができればと思います。そもそもトクシマとのおつきあいは福島型の木造仮設住宅というところからはじまりまして今に至っておりますけれども、震災当初に木造仮設住宅の取組に奔走していたその当時から感じていたことがありました。それは「被災者の仮の暮らしはかなり長い年月がかかるだろう」ということで内野さんともよくそのあたりのお話をしておりましたが、すでに5年目に入っております。岩手、宮城は、高台移転に具体的に、東北支部の会員が具体的にかかわりを持って取り組んでいるところもあります。

福島では、いよいよ帰還困難区域が開放されて住民が戻る檜葉町に対して、われわれ会員になにができるのかという議論をは

じめました。そういう状況の中で特に私が感じることは、今日の伊東先生のお話にもありましたように「作品」「作家性」という項目が、あの被災地の、被災者の方々が、求める項目の中に、おおよそ含まれていないという現実であります。

岩手の会員は「リアスの風」という組合を立ち上げて高台移転がいよいよ着工します。皆さん日常の仕事の時間をさいて頑張っているのですが、被災者とのかわりには日常の生業とは違った取り組みが求められ、多少のストレスを感じながらの作業のようであります。宮城でも同じようなことを感じているようです。このことは、おそらく、先ほども話したように住民と建築家（作家、作品）の隔たりであり、そもそも存在しているものが災害時により強くあらわれたものと思います。だからといって、がっかりすることはなくて、被災者と向き合う本質は「作品」ではなく「支援」であるから様々な立場の方々の現状に即した丁寧な聞き取りから多くの可能性を導き出す作業であって、伊東さんの講演のなかにもありましたように「建築の手前」のことが重要な要素であり、より建築家が強く発揮できるスキルでもあります。そのことが非常に大切であって、いわゆる、ものを作る手前のことが今後ますます求められるということがいえると思います。われわれはそこにもっと自信と誇りをもっていいと思います。我々は日頃つくることが八割以上みたいなところを思っていたのではないかな。でも被災地の人はそうではない。その手前のほうが八割以上大事であって、できるものは、ちょっとした品のいい建売くらいのものでできれば満足なのです。われわれは

「それでいいのか」という議論をしてしまう。じゃこれはいったい何なのか。ということを考えなくちゃいけない。今日も、先生が話したように、これからわれわれの生業はどこへ向かうのかという転換のきっかけにしくちゃなんないのかなど。というふうなことを思います。福島の実地に居て結構まともな視点でものを言ってきていますが、社会の現状はそれとはまるで違うでたらめな動きをすることが間々あります。

鴨長明の方丈記にも、とてつもない天災がおきるとかならず世の中の矛盾というもの露呈される歴史が幾度も繰り返されると書かれているように、福島の場合も、同様にさまよい続けています。原発の災禍、文明の災禍、というもののウイルスが、時間がたてばたつほど、さまざまな疾患を生んでおりまして、まあ一番大きな疾患は「分断」ですね。地域の分断、ふるさとの分断、そして家族の分断、夫婦の分断、まさに分断がさまざまところに露呈してきています。そもそも故郷にもどれない原発災害が旧来の災害支援法では対処不能であることや、公営住宅法という、とっくに使命を終えたものを復興という冠をつけることによって、また生き返らせて数と時間を競わせる。伊東さんも言っていたように、平等、公平という、非常に問題を多く抱える言葉が、第一優先されるというところがありまして、われわれも、同じ矛盾を常に感じています。

たとえば本当に高台にまとめていくだけでいいのか、仮設暮らしが長引くほど要介護の12345の5、4は、どんどんいなくなるんですが、一方で、生きる糧を失った要介護1、2のひが増えている現状。

それをまとめて住まわせることによって本当にこの方々の介護は、誰がしてくれるの？というところまで我々は見える。ただ時間と数を競うっていうことじゃ決してない。まあ、歴史の大災害ではいろんな人たちが、絶望するんですね。私が今福島にいてですね、大切にしているキーワードは「正しく絶望する」ということで「正しい未来につなぐ」ということです。

内野：ありがとうございます。辺見さんは3.11以前から、地域に密着した形での仕事をずっとやられてこられているわけなんですけれども、その、被災後のさまざまな矛盾がどんどん露呈してきて、さらに手前の話が大事だということを、会うたびにおっしゃられていて、今日もまたそういうお話だったんですけれども、さきほどの伊東さんのご講演でも最後のほうは手前の話というかスケッチというか、そういう話が非常に多くて、同じことを思われているんだなあというふうに思ったんですけれども、伊東さんそこを今の、「正しく絶望するところから始めよう」ということばを受けてお願いできたらと思います。



### 作家性、コンペティション

伊東：僕はまあもうちょっと気楽にというか、絶望するというより楽しく思ってるんですけどね。今の日本が、ちょっとひどいことになってるなと思って、沖縄の問題もそうだし、原発の問題もそうだし、去年、調子悪くなる前は、国立のスタジアムの問題も、いろいろ取り組んだのですけれども、なにがとも、なにを言っても、応えてくれない。まったく無視されるという・・・。沖縄だってそうですよね。原発もそうだし、ひたすら議論をしないで、一方的に、嵩にかかってすすめていく。こいした政府のやり方はほんつとにもう、それは、絶望としかいいようがないんですけれども・・・。でも、できることはあるからな、と、さきやかなことをやっていくしかないなと、思っています。

ただ、作品とか作家性という、すごくむずかしくて、たとえば今日本で、公共の仕事というかならずコンペティションのシステムにのってかないと勝てませんよね。そのためには、作家性というか、作品的なことを、特に海外でのコンペティションに勝つためには、日本以上にオリジナリティとか、特異なことを提案しないと勝てないシステムになっていて。勝つために、建築家は、おれはこんなことやってんだぜみたいなことを言わざるを得ないという。だから、僕は最近勝てないんですよ。今日お話したようなことを考えていたら、もうコンペティションに勝てない、もうあんまり海外のコンペはやるまいっていう、特にヨーロッパ、欧米では。そういう風に、決めました。まあ日本では、もうちょっとがんばりたいなと思っていますけど。そうすると、

若い、優秀な人たちが、やっぱりそこをクリアして勝たないと、さきへ進んでいけないということで、おなじことを、繰り返してしまう。だから、建築家だけの問題ではなくて、社会のシステム、やっぱり日本、なんだかんだ言っても、まだ、近代主義のまっただなかにあって、いろんな物事が、近代の中で動いているから、生産のシステムとか、そういうことを考えると本当にまさしく絶望かもしれませんね。

内野：平等、公平という辺見さんのお話とか、それと今のコンペティションの話、ですけども、コンペとかプロポーザルをやることによって平等に、若手にもチャンスがあって、ということですけどもそれが、なにかフックの効いたものでなければ受からないんだということになってしまっている状況と、たとえば建築士会なり、地元に着した設計士が住民の方々の話を聞きながら何かを考えていって、でも、それはそのまま仕事にすることはできない、という、非常に、それこそ矛盾ではないかなという風にも思います。ちょっと話が脱線してますけれども。地域に着して活動することがそのままものになっていくというか仕事になっていくというようなことこそが本当は平等であり公平なことかもしれないな、今日ちょっと、辺見さんとも話をしていたんですけども、お仕事の中で、古谷さん、今のような話についてどのようにお考えですか。

#### ポストの数ほどの建築家を

古谷：ご質問に答えられるかわからないですけども、ひさしぶりに伊東さんの話を伺

って、いろいろ感じるところがあるんですね。去年本当に伊東さん雲隠れされていたので心配していたんですけども、お元気でよかったです。不死身だった、みたいな感じで、本当によかったなあ。それからこれは前から感じているんですけど、伊東さん僕にとってはある種、メディアテークで負けたとき以来かもしれないですけど、もっと前からかもしれないんですけど、目標としている建築家で、伊東さんがされようとするとか発表されたこととかすごく僕にとっては、ある道筋を示していただいていた、そういう方なんですね。その伊東さんなんだけあるときから、ぼくはこれ、ついていけないかも知れないと思い始めたことがあって、それは今日見せていただいた台中のオペラハウスのコンペをとられたばかりのところで、プロジェクトはもうちょっと進行していて、きれいなCGプレゼンテーションされていて、美しい斬新だし、これはおれはちょっともう目標には据えられないかもしれないという、距離隔たりを感じていたところがあるんですけども。今日話を伺っていると伊東さんの方がぼくがなんとなく思っていたことのほうに近づいてきてくださっているようなところもあるように感じて、距離がまた近くなったような感じがします。

最後におっしゃっていた、建築はやっぱりものをつくる、これからもものをつくるってことにおいてとても大切な責任と、果たすべき使命があるとは思いますが、ものをつくるということよりはどのような風に仕組みをつくっていったらいいのか、どうやって協働したらいいのか、どうやってあるものを生かしていったらいいのかという、

そういうことを考えることのほうにもっと重要な役割があるんじゃないかっていう風におっしゃったんですけれども、これはすごく重要な示唆だと思うんですね。20世紀の建築家が近代建築を学んで、どうやって、いかにもものをつくるかっていうことをたくさん研究も勉強もしたし、身にもつけたと思うんですけど、21世紀になってこのかた、それと同じくらい、それ以上に、建築をどういう風に使うのか、あるいはそこにおかれている状況をどういう風に生かすのか、ということ、普通の方々よりも我々は得意なはずなので、どうやって使うかとかどうやって生かせるかっていうこと、そこに建築家の見識というものを生かすべきじゃないかっていうのをつねづね思ってたんです。今日、これがそうだと思うんですね。この空間をこんな風に使うことができる。ここをよく知っているご近所の方はここまでは思わないんだけど、こういうふうにして見せられたら、こういう使い方があ、じゃあそうならおれもこういう手伝い方ができるとか、溶接ができるとか、いろんなことが生まれてくるわけだけど、最初にこれをこういう風に使おうじゃないかっていう、牽引力って言うか、つかみがないと、なかなかそうならない。そういうところに建築家の役割がある。特に人口が減少しはじめて、縮退する社会といわれるなかでいろいろなリソースがある。さっきの廃校もそうですし、それ以外にもこういう倉庫もあるし、いろんなものがある。それを、ただ壊すとか朽ち果てるのに任すんじゃなくて、ちょっとしたことで活用するとすてきな場所になって、それが人が人に出会う場所になる、ということをやっぱり、見え

る形にするっていう、それが僕たちのすごく重要な役割だと思うんです。だから、伊月さんがここをこういう風にしようとおっしゃってこれを実現されたというのはすごくいいと思う。



ただ若干ステージが高すぎるような感じが……。そっちから見ると首が痛くなるし、こっちから見るとなんかダンサーになったような気分でちょっと落ち着かないんだけど（会場笑）、でもそれも含めてこの空間の発見であるということで、試行錯誤も必要ですし、次のときもうちょっと低くなると……。でもまあ、こういう生かし方があるっていう、建築家の仕事として重要なことだと思います。

ぼくがそういえば思い出したことがあります。アンパンマンミュージアムをつくったときに、高知に素敵な女性がいて、その方は、図書館をたくさんつくると言う。子供のために図書館を、星の数ほど、あ、ポストの数っていったんだ、ポストの数ほど必要ですよっていう活動をされている、オキヤマさんという方だったんだけど、その女性に頼まれてアンパンマンミュージアムで講演をしたり、いろいろ協力をしたりするんですが、図書館、あのころですからもう20年前。図書館が、公立の図書館っていうのが非常に硬直化して閉塞している。

むしろそうじゃなくてこどものための図書館は街角の、ちょっと出てくとポストがあるくらいの距離感のところに、あちこちに、なきやいけない。いうことをおっしゃったんですね。ぼくはこれほんとに名言だと思いました。子供のためだけじゃないですよ。およそ住民というものにとってはそれが必要だと。でそのときその彼女の発言をヒントにもうひとつ思いついたことがあって、もしかしたら建築家もポストの数くらい必要なんじゃないか。日本は建築士の数が余りすぎているとか、いろんなことわかってはいますが、そうなんじゃない。本当は、なにかひとつのやり方ですぐれたものを手本にどんどんつくればいいんだったら確かにそんなにいらないのかもしれないんだけど、こんだけ全国が千差万別それぞれの津々浦々が、個性と特徴と、別々の問題を抱えているとしたらその一つ一つに、その場所を考える、つまり、ポストのような建築家が必要なんじゃないか。で、そういう建築家を生み出すことをしてこなかったし、世の中もそういうポストのような建築家がいてくれるっていうことを、思ってもみてないんじゃないか。と、思ったんですね。大学で教育して送り出して、お前ら何やっているんだっていうポストの数ほど送り出してっていうことを一応大儀としてやっているんですが、今日伊東さんの話をうかがって、これはポストのような建築家だと思うんですよ。大三島まででかけてってポストになっているわけなんですけど、でそれがやっぱり必要だと思うんですね。

それから辺見さんのこと。この方はすばらしくすてきな方で、ぼくはこの四国建築大賞のお手本となった東北建築大賞という、

もうあれ、8回目になるんですね、えっとだから八、九年前くらいの、もちろん震災よりもずいぶん前の話です。でその第



1回的时候に、辺見さんが応募された作品がありまして、こっちの目が節穴だったからそれを大賞にできなかったんだけど、辺見さんが応募された作品はなんと「コミュニティ再生長屋」という、まあちょっとそのころ聞くと恥ずかしいような名前の付け方されていたんですけど、まさに今の震災後みんなが必要としている、こういうものが必要だっていうことを、まあ辺見さんは、ずっと思って、コミュニティを再生できるような、おばあちゃんがよって来て縁側に腰を下ろせるような中庭をつくる、しかも縁側に腰を下ろしてみると、見えているのは隣のうちのとたんの壁みたいな、あれとたんだっけ？いし？石のかべ、とにかく隣の家の壁が借景になっているような長屋を応募されたんですけど、まあ、震災よりはるか以前にすでに東北の、そういうそれぞれの地方都市が、人口が減少して少子高齢化が進んでいくなかで必要とされているものはコミュニティの再生である、いうことをいわれていた建築家です。すばらしい方です。当時僕たちの目が節穴で、あまり評価できてないのが残念です。

内野:ありがとうございます。辺見さんは、なんでも疑ってかかれということをお私たちにいつも教えてくださるわけなんですけども、ちょっと話を戻してあの伊月さんのね、あの COWHOUSE 今日優秀賞とられましたけれども、リノベーションとかリフォームって、その家がほんまにそうであるべきかっていうことを疑ってかかるというか、こうじゃないかたちがあるんじゃないかというところを発見するということに面白みがあって、楽しかったりするわけですけども、このステージとか、この会場も、そういった、こうじゃなくてもいけるんじゃないかというところをまあみんなで話し合ってきたようなことです。ステージの高さはですね、単管足場の既製品の寸法で決まっていますすみません、これ借り物で切るわけにいかなかったんで、申し訳ありません。

ポストの数ほどの建築家というところも、つまりは建築家のあり方そのものを問い直せという風なことではないかと思うんですけども、われわれそもそも、建築の設計というようなことを、建築設計とは何かというような講義をうけたおぼえはないですし、こういう用途の建物だったらこういう答えがあるよというようなことを学んで、それをどういう風に変えるのかということをやっつけているだけなのかもしれないという風にも思いますし、図書館だから図書館、というそのプログラムそのものを疑ってかかるというようなことが、まあ、お二人が戦われたメディアテークの中でもそういうことがあったわけですけど、その、疑ってかかる範囲というのをもっともって手前のほうに引き寄せなければならぬ

じゃないかと、いうことをおっしゃっている、辺見さんに、もうちょっとそこを掘り下げていただけたらと思うんですけども。疑う話を。

#### 建築家という名札の前に

辺見:あの、ちょっと言い忘れたところで、あの一やっぱり震災のときに、声がかかるって言うのは、どういう人にかかるかって言うのですね、日々の、生活の中で、どういうふうな、人との付き合いをしているか、簡単に言うと PTA 活動だとか消防団活動だとか、町内会活動だとか、そういうことをあのきちっとやっている人に、まず声がかかりますね。あいつに言ってみるべと。いうふうなことでもう、復興のですね、ま、地域のお手伝いをすると。いうふうなことにつながっているんですよ。いわゆる高いところから見下ろすようなかたちで、私建築家ですよなんていっても一切声かかんないですね。あのさきほど古谷さんがおっしゃったように、誰もそういったものを、求めてもない。

というところで、まず最初は、人として、どういう生き方をしているかということが、あ、こういう有事の時には、一番最初に現れるなっていうようなことがありましてですね。われわれ建築家っていう名札をつける前の、人としての名札、が、しっかりしているかどうかということが、あの先ほどあの事務所協会の会長さんがですね、あの、松田平田さんの言葉を借りて、いわゆるその、商いじゃなくて、世間のために、地域に根ざすために、ということにやっぱりつながるのかなっていう、どうも我々その辺、ちょっと見失いがち、特に都会は先ほど話

した様にですね、そういったものが非常に希薄。だから、地域にいけばいくほど、非常に評価になるということをやはり、もっとわれわれは自覚して、地域にどう、かかわっていくかってことがですね、今日も伊東さんが言った、話の中にたくさんあったなというようなことを、まあ、感じました。

## 21 世紀の建築家は地域から

内野：ありがとうございます。地域とのかかわりということで、建築士会連合会の三井所会長が徳島に縁をおもちでよく来られるんですけども、今日のような会をするんですけどもという相談をしたときにおっしゃられていたのが、三井所さん、東京とかいろんな地域でモダニストとしての新しい建築を作り続けていたんですけども、九州の有田市に入っていったなにか仕事をしないといけない、となったときに、それまでの自分の、いってみれば磯崎さんの建築のような、先端のものをそこにもちこんで、なにになるんだ？という風に、それまでのご自分のスタイルに疑問を持たれたらしいです。そこで、地域の、有田の、焼き物とかですね、元々きれいな町並があるところを、どういうふうにするのかというときには、今までの衣を脱ぎ捨てて、もう一回やり直そうというふうに思われた、と。それまでのことは、全部ゼロにしてもっかいやり直したんです、というようなお話をされていました。今回3.11のことを受けて、まあショックはありますけれども、そのときの絶望に比べればこの絶望は大きくはない。がんばれますというようなことをおっしゃっていました。

地域とのかかわりというなかで、われわ

れは地域で設計をしています。その三井所先生は有田に入られたときに、しくみをつくって、しくみを地域のかたがたと作ったうえで、地域の建築士の方々に、こういう風に設計しましょという話をして、実際にいろんなところで手を下したのは、元々地域にいらっしゃる設計士だったという話があります。あの一さきほどの伊東さんのお話のなかで、大三島のこと、いろんなことが同時多発的に展開しているというお話ですけれども、ここで、その地域の建築士といえますか、設計者の方々との連携、そういうことってというのはどんなものなのでしょう。

伊東：ぼくは東京で、今日もちょっとお話ししましたように、数年前から塾をつくっているんですね。最初はそこに来てくれる大人の塾生の人たちは、これからの建築を議論するような場になればいいあと、そういう人たちが集まってくれるかなと思っていたら、あんまりそういうタイプの人たちじゃなくって、そのかわり、大三島なんかについて、もう、移住してしまった人もいますし、これからまた移り住みたいという人もいますけれども、もうちょっと違うタイプの建築家が、でてきたんだなっていうことに僕自身がおどろいたし、触発される場所がありました。つまり、彼らは、僕らが若いころ、おれはこんな建築作ってんだぜみたいなことを思っていた、そういう気持ちはぜんぜんないんですね。それでもっと地方へ行って、地方の人たちの中に溶け込んでいく。大三島の人たちも、こいつはいいやつかもしれないと思いはじめると、いろんなことを頼んでくるんです

よ。バス停作ってくれとか、うちのやっているお店を、レストランを改装したいんでやってくれないかとか、ほんとうにささやかな仕事ばかりなんですけれど、そういうのを結構喜んで、ボランティアで、自分の費用で通って、やってくれる。

地方の、ここにおられる方にも、そういうことをやっていらっしゃる方はたくさんおられると思うんですけども、そういうことは地方に出入りしておられたら、あたりまえのことかもしれないですけども、ぼくら、東京に住んでいると、ああ、なんか建築家、かわってきたな、と。むしろ、これから、地方から出て来る建築家、それは古い、空き家を改装するとか、レストランを少きれいにしていくとか、そういう地味なしごとからはじまるのかもしれないけれども、そういう人たちの方が、これから、建築家らしい建築家になっていくのかな。そうやって、社会の中に、地に足のついた、仕事をしていくということが、これからはばらくの間、すごく重要なんじゃないでしょうかねえ。そうやっていま辺見さんがおっしゃられたように、建築家って、けっこういいことやるやつらじゃないかみたいなことをね、まず信頼感を得て、そこから先だと思いますし、逆に言えば、僕はもう、いわゆる 20 世紀型の建築で、どうやろうが、そんな新鮮で、見に行きたくなるような建築なんてほとんどないような気がしているんですよ。だから、むしろそうやって地味な活動のなかから、何かを発見して、21 世紀の建築家は、そういうところから生まれてくるんじゃないかなという気はしています。

## 東京と地域 世代と世代

内野：ありがとうございます。大三島に入っていていかれて、そこでなにか活動される方々がふえて、それがまたつながっていった、そこの若い設計士の人の中に受け継がれていくとすばらしいなと思いますけれども、たとえば事前復興で先行高地移転のこととかをやっていると、ある日突然被災して、そこから下の街がなくなってしまったとしても、そのまえまでにつくっておいた街はまあ生きながらえていくというか、つなぎ目が長くあるというか、そういうようなことにつながっていくんじゃないかというように仲間内で話したりするんですけども、今の大三島でのことが伝わって行って、次の世代の設計士、次の世代の村の建築士のひとたちにつながって行くようなことがあればすばらしいと思います。

われわれ JIA も、建築士会も建築士事務所協会もそうですけども、高齢化の一途で、JIA なんか全国の会員の平均年齢が 62 歳です今日聞いたところでは。とんでもないことになっているんですけども、これを、いかに新たな人たちにバトンをわたしていくか、これを、世代間で重なりながら、やっていることを見せながら、次の人たちが学んでくれてその次に伝わっていくというのが一番すばらしいんだろなああと漠然とは思いますが、そういうことが、おれはこんなデザインやってるぜみたいなことじゃなくて、本当に求められるものやっていくことで伝わっていくのがいいんだろなというふうに思います。そういうことを、ずっと学校の場面でしてこられている古谷先生、そんなことで変わってきていることってありますか？

古谷：さっきの話につながるんですけどもね、たとえば東京の建築家、その地域の建築家と、どういう風に協働、協力できるか、という大事なテーマで、やはりこれだけ気候風土が違えば、昨日なんか北海道で3℃だったのに、こっちのほうでは30℃なんていう、そんだけ南北に長いというところで、それでも共通の日本語を話していただけるわけだからそこでさまざまところで交流も生まれるし協働することもできるわけですね。やっぱり人って自分以外の誰か全然違う人と知り合ったり、あるいは協働したり、なんかすることを通して刺激されたり、学んだりあるいは新しい目が見開かれたりすることって、すごく多いと思うんですね。違う人たちが協働する、出会って一緒に何かをやるっていうことがとても重要なんで、地域の方だけがその地域での仕事をしてればいいって言うわけでもない。よそからとんできたように見えるかもしれないけども、その人がいて、なんか言う、岡目八目でなんか言ったためにそれがきっかけとなって地元の人たちがそこから刺激を受けて一緒にやるとなんかできる。そういうことが、どっちが欠けてもできない、というようなことがあるんですね。

世代もおんなじだと思うんですよ。ベテランと、老練な人たちだけがいたんでは何もできないし、元気だけの若くて未熟な人たちだけがいてもなにもできない。うまく協働したり混ざりあったりしていると、なんかお互いを生かしあってできるっていうか、両方がいてはじめてできるってことがあるんですね。地域差も含めていろんな人が共同する、年代、世代を超えて協働するっていうこと、どっちも重要なことだと

思うんだけど、今その場面がなかなか見つけがたい。建築家の中だけじゃなくて一般社会の中にそういう協働の場面がほしいわけなんです。かつてはたとえば、稲作をするといったら共同体でいろんなことを協働作業をしないとできない、自分ちの田んぼだけじゃできない、水はどうやって管理していくかそれをどうやって売り捌くかいろんなことがあったんですね。しかも忙しいときに子守を誰がするのか、いろんなことが全体としてシステムをなす。あらゆるところに折に触れて協働する場面があるなかで、世代を超えていろいろ伝承されることもあるし、よそからやってきたひとのあるアイデアを、これがなにかを変えていくこともある。

現代ではその協働作業は減っているんですけども、分業化も進んで専門化も進んで、さっきのまた伊月さんのこれに戻るんですけど、これホテルでやると簡単だけどこれでやるとすごい大変だったと、みんなが汗を流してやる、これこそが共同作業で、いろんな人が共同しないとできないわけですね。こういうことをすこしずつすこしずつふやしていくと、そこで違う人と知り合う、すごい特技を持ってるやつを見つける、それから、おれは理屈はわかってるけど腰が立たないんだよ、若い奴行ってこいって言えるとか。若い子はそれで行ってるとか、そういうような場面がこういうところには山ほどあって。今では日本のなかでそういう共同作業というところほとんど祭りぐらいしかもう残ってないんですよ。おまつりやるのはいいんですけども、おまつりだけじゃなくて、おまつりは元来は、厳しい労働があつて、その一応打ち上げとして

あるようなものなので、打ち上げだけじゃ面白くなくて、面白いけど、面白さも中ぐらいになるんですが、なにかをやってくためにいろんな人が混ざり合って協働するっていう場面をうまくつくりあげてくつのがぼくはいまの、キーワードだと。

さっきコンペティションの話があって、コンペティションも、出すとするとどつかの設計事務所、資格のある設計事務所が応募してそんなかからいちばんいいやつを選ぶみたいなの、その単調なしくみばかりがいまなされているわけですけど、たとえばこのプロジェクトであれば新しいアイデアもほしいし、それを地元でささえる人もほしいからそれが組み合わさってやりなさいと。アートポリスなんかでは実際そうされていると思うんですけど、そこがまたひとつの出会いや協働の場面になるようなコンペティションのつくりこみをしていけば、これもそういう機会を増やすことになるんじゃないかと。発注者である自治体が、民間のクライアントも含めて、そういうことを大いにやって気が付いてもらいたいな、逆に言えばわれわれはそういうことをすることもできるんだよといい続けなければならぬのかなという風に思っています。僕は本当はコンペは応募するほうが好きなんだけど審査する側をやらされるんですけども、やらされる時はそういうことをやりたいと。

その協働するときの秘訣があるんですよ。さっき伊東さんは、もうあんまり新しい形で魅了することはもうないかもしれないよっていわれたけど、若い人たちをこの中に入れて協働するときにはどうしても必要なものがあるんですよ。何かあたらしいことを

やれっていわないと、若い人はやる気がしないんですよ。年寄りがもう築き上げてきたすばらしい文化だからこれを受け継いでいったって、もうめんどくさいんですよ。でもなにかちょっと、お前新しいことを考えろ、いままでないやつを考えろっていうところがあるとわかものはやっぱりやる気が出る。今までどおりじゃなくていい、このあたりから先はおまえが考えろっていうところがあることが必要だっていうことですね。

### つなぎ目となる、村の建築家

内野：ありがとうございます。話がすごく広がっていくのでどこをとらえていいのかわからなくなってきたんですけども、設計士、建築士という仕事自身が、非常におおきな共同作業でもありますよね。設計の段階でも、構造の方とか設備の方とか、もちろんお施主さんとの協働って言うのが一番大きな協働ですけども、現場に入ってから、基礎から木工事から、いろんな業者の方々との協働の中でのものができるというのが我々設計士ではないかなという気がします。徳島なんかだと、田植えのシーズンになると職人さんが来なかったりとか、今日稲刈りやから来ない、というようなことが、あるんですよ。農業やっている人、週末農業をやっているような人たちによって下支えされている建築現場っていうようなところもありまして。

先ほどの大三島の話の中にも、ワイナリーとか、みかん畑とか、いろいろありましたけども、徳島に佐那河内村という、村がありましてですね、県内唯一の村でが。そこで空き家を改修して、いろんな人に入っ

てきてほしいというプロジェクトをやっているんですけども、それをやっているうちに、我々の仲間の設計者が、自分が改修した空き家に入るということになって、そうしようとなったときに、村のほうの意向でもあるんですけども、改修工事そのものを地元の職人さんでやってほしい、地元の職人さんに入ってもらって、それこそまあ、口は出るけど腰が立たない大工さんが若い人を教える場所にしていくと。ストックは山のようにあって、空き家をどうするかっていうのはものすごく深刻な話のはずなんですけども、皆さんご存知のようにプレカットとかで工場ですべてできてきてしまって現場は建てるだけというようなことになってしまっていて、職人さんの数は減るばかりなんですけども、そういった田舎の改修工事のところ若い人がやってきて学んでいくということもやっていこうとしています。

設計士の彼は、いうたらその村にそれまで、建築士は一人もいないんですね。ですから村の建築士として仕事を始めるわけですが、その村の方々からするとものすごい人が来るというか、待ちに待った人がやってくるみたいな、すごい歓待を受けて、飲み会をしてもらったりですね、三和土をするっていうたら周辺の若い人がやってみんなでたたいてみたりというようなことがはじまっていて、これは、新たな建築士の姿のひとつではないかなあとと思います。建築ができていたらいいっていうのではなくて、農村の、農家の風景の中にいる人なんですけども、たまたま建築士もやっているというような、まあ、非常に新しいスタイル、みたいなことも生まれていたりもして、

古いようできては実はとても一番新しいんじゃないかな、というようなこともおきています。

かなり話がひろがってきたんですけども、今日、まあ壇上ですね、皆さんのお話を聞いているなかで、さまざまな糸口というのがたくさん出てきたと思うんですけども、お三方に対してこんなことを聞いてみたいですか、いや、うちでは、自分の地域ではこんなことやってるよっていうような話をですね、もしして下さるかたいらっしゃったら、まだちょっと時間がありますので会場からもお話をお聞きしたいと思うんですけども、いかがでしょう。

#### 学校教育と地方

佐藤：今日はどうもありがとうございます。伊東さんからこういうお話を聞くってことそのものが、本当に久しぶりっていうより何十年ぶり、あらためてこうやってお聞きして、伊東さんがこういうことをいうようになったんだなって、失礼な言い方ですけどもそう思いました。私自身もある時期東京の生活をして、建築家を目指してという思いをもっていた時期から、Uターンしてきて、最終的にはこうして地域の中で建築士としてどういうことをやればいいのかということで活動をしているわけです。私自身も今60を過ぎていろんなことを考えるようになったときに、古谷さんからもお話ありましたけれども若い人たちをどういう風にしてというのは我々建築士会の中でも非常に大きな課題です。

伊東先生が私塾として、後継者というわけではないんでしょうけどもやっておられる。なぜ、私塾を開きたいか、開かなきゃ

いけないかという思いに至ったかをちょっとお聞かせ願えたら、ありがたいなと思います。

伊東：それ、言いにくいんですよ実は。隣に先生がおられるから。ぼくはずーっと大学であんまり、入り込んで教えないというのを、山本さんも今日おっしゃってましたけれども、そういう風にあるときから決めて。それは、古谷さんみたいに本当につくっている人が教えている分にはいいんですけども、論理ばかりはなんかすごいこと言っているけど、本当につくる気があるのこの人はみたいな人が結構、スタジオで教えていて、それが結構、うちの事務所に入ってくる若い人たちでも、悪影響だなんてすごく思うんです。特に最近はコンピューターで図面かいているし、それから環境何とか学科みたいな、昔からの建築学科とはちがうものがたくさん増えていますよね。そんなところは有名な先生はいるんだけど、ほんとにものをつくろうという人が、真剣に教えてないから、まあ極端なことを言ったら、基礎の上に建築があることすら知らないような若い人が、建築の論理を語らしたら滔々としゃべるっていう。そういう人が増えてきていて、特に卒業設計コンクールみたいなものにたまに呼ばれていくと、最悪だなあと感じてだんだん途中で帰りたくなるんですね。コミュニティはみたいなことばかりのオンパレードで、それでお前らは本当にこれがいいと思ってんのか、こういうところに住みたいのか、と聞いてみたくなる。論理が一人歩きしているような設計ばかりで、建築っていうのは、ものとしてのリアリティを持たなくちゃい

けないんだよっていうことを、若い人と一緒に考えたいなあと思ったんです。それが私塾をやりたいってことになって。

で、そのついでに小学生も面白そうだから教えてみようと一年間、20人くらいの小学校の高学年、3, 4年生から6年生ぐらいのこどもを教えています。これはほんつとに面白いです。この子達はすごく夢を描けるし、奔放だし、そうでいてある程度の論理的な思考もできる年頃なんです。それが中学校に行くと、急に常識が勝ち始めるので、中学生でその子達がどうなっていくかをフォローしてやろうと思ってOB会みたいなものを作って、年に一、二度集めちゃあどうなっているかを見はじめているところなんです。この子達だったら本当にすばらしい建築家になるのにみたいな感受性が豊かな子供たちが、中学生なり高校生になっていく間に、どんどんその感受性を摘まれてしまっていくっていう。

子供たちには、逆に大学の建築学科の学生さんがティーチングアシスタントとしてほとんどマンツーマンでついて来ていますが、むしろ、そのTAの学生のほうが教わっているんじゃないかという気がするんですけど。そういうところへくると、学生さんたちもすごくなごやかになるし、いい感じになっていて、まあちょっとしたことだと思えるんですけど。まあそういうことで塾を始めて。

特に今年はほんとに大三島一本に、大人の塾生は絞って、このあいだ、今年の塾生二十数名とっしょに大三島に行って、三日ほどすごして、毎晩議論をしていたんですけど、古谷さんが言われるように、その地方の人たちと、どういうコラボレーショ

ンができるのか、島ではあんまり建築家がないので、もうすこしこういうところから来てくださるとうれいすねー。

内野：ありがとうございます。古谷さん学校の話の続きをお願いします。

古谷：伊東さん今日はオブラートに包んでいってくださったんだけど、端的に、大学の教育が悪いからですよって言われる。今日は微妙にいろいろオブラートに包まれてたんですけどね。伊東さんから出された宿題で、何とかしたいというのがひとつあります。建築の学生に、ぼくはまだしばらくは建築学科で教えなきゃいけないわけなんですけど、なんでもっと、ものがどうやってこの地面の上に建ってこうできるのか、空間がどうやって支えられるのか、その最初のところをできるだけ一年生とか、入ったばかりの学生にきちんと教えてくれないかな、と言われたことがあって、学会で一緒にしたときに、どういう方法でそれを具現化したらいいのかっていろいろ試行錯誤はしているんですけど、こどもとのワークショップみたいなやるだけじゃだめなんです。

なかなかまだ僕自身も答えは出てないんですけど、一方にリアルにもものをつくるというのがあって、もうひとつは理論なり、工学なりを勉強するのが並行すれば、教育は少しよくなるんじゃないかと思うんですけども、僕が期待してんのはさっきのこれですよ（壇上の椅子）。こういう機会が増えくるとそこに学生をつれてってやることのできるわけで、こういうようなことをやっているうちに、大学でいう低学年の建築

科に入ったばかりの子達がそういう場面にかりだされてというような、そういう仕組みをつくってあげるといいのかなということは思っていますね。瀬戸内海だけであんなにいっぱい島があつて、これ伊東さんが全部まわっているわけにはいかないですから、あのやっぱりここにいる皆さんが全員いってもまだ島の数のほうが多いかも知れないぐらいなんで、そういうところに出かけて行って下さる人がいて、そういう人が若い建築家や、若い学生をまきこんでいただいて、一緒に連れて行っていただいて、なんかやると。というような機会が増えれば、ちょっとましになるかなあと。思うんです。

で、そのときに思ったんです。必ず、なんか新しいことをやらせてやってくれと。それは長年研究室の学生をそれこそ、島根県の雲南市に連れてったり、徳之島に連れてったり、小豆島、なんか島が多いんですけど、に連れてってなんかやるんですけどそのときの僕の経験を通じて、ひしひしと感じる。これ先輩たちがせっかくこれだけ築いてきたものだからそのとおりにやれよっていったらもうだれちやって全然だめになっちゃう。先輩たちがやらなかったことをやっていたっていうとはじめて元気になるっていう、そういう習性はあるんですね、まあ自分でもそうですよね。

#### 大学のフィールドワークと地元の建築家

佐藤：いまほんとにいいお話を聞いたわけで、私も本音を言えば、大学がちょっとおかしいんだろなっていう思いをずっともって。

古谷さんにちょっとお聞きしたいんです

けども、徳島も、全国各地そうでしょうけども、各大学がフィールドワークっていうような形で古民家や空き家を再生するために、休みになったら労働力も含めて彼らが入ってくる、これそのものはものすごく重要な話だと思うんですけども、一歩間違えば、なんか、ぱっと来てぱっと去ってしまうというような。地域に根ざすっていうことってどういうことなのかなっていうことを考えます。我々地域で生きている人たち、建築士もたくさんいて、そういう人たちに対して、どういう風な環境を作っていくかっていうのは非常に重要な話で。失礼な言い方かもしれませんが、伊東さんがどういう風に大三島で、これからやっていかれるのかなっていうのは非常に関心があって、ぜひ、いろいろな会として接点をもっていたらなど、個人的に思います。

古谷：まさにその、いろんなところの学校がそういうフィールドワークをする、紹介されるから皆さん結構やるんですよ。やるんだけどそのときにやっぱり必ず必要なのは、その、やっぱり優れた建築家、そういう観点からそれにきちんと関与する人がいてほしい。でもこの人は継続的にいることはできないし、いなくていいんです。あるときにそれを批評したり、あるいはこうだってアイデアを出したりすることができるようやっぱり優れた人の参画が必要です。でもそれ以外のときそれを今度はその場所にとっては継続しなければなりませんから、その継続するっていう意味で、その地域に、かかわりの深い建築家、そういう方の存在も必要だし、その地域に継続的に入り込んでそれをサポートする教育機関

があるとしたら、この先生はそれをやっぱりやるべきなんですね。継続的に。で、いまこれが足りないなと思ったら、よそからだれかゲストを呼んできたりしながらも、それをずーっとタテにつないでいくのは、その土地にいる先生がやらなきゃいけないことで、というふうに思いますね。

## 二拠点居住と BBQ

伊東：東京都の住民に去年アンケートをとったら、四割が潜在的には地方に移住したい。まあぼくもその一人なんですけれども。もうひとつのアンケートでは、約三分の一弱、27、8%の人が、二箇所に住みたい。ぼくも今日もチラッとお話したように、小さな小屋を作って、そこで月に一週間でも住めると、いいなあと思ってまして。そういう話をすると、ぼくの周りにいる人たちが、私たちもそうしたい、シェアハウスみたいなものをつくって、とくに四十代五十代くらいの独身、まあ結婚しててもいいんですけども女性の人たちは、女性たちでそのシェアハウスにやってきて、話をしたり、料理をつくったりっていう生活をしたい。三分の一近くの人がそう思っている。まあ割と漠然と考えている人も結構いると思うんですけども、それにしても二拠点居住っていう人が、これからかなり増えてくると思うんですね。そういうことがうまく始まり始めると、やはり地方が変わってくるかなっていう、気はします。

古谷：思い出した。辺見さんのところで、東北支部でシンポジウムやりまして、住宅大賞のチャンピオンたちばかりあつめたグラウンドチャンピオンっていうシンポジウ

ムやって、そのときに出た面白い話があるんですよ。東北地方のいろいろな住宅、工夫が凝らされていて、でものびのびとして、それがね、大概ね、ルーフバルコニーとかでBBQとかね、庭でBBQとかね、それでこういうの東京じゃできないでしょっていわれて、東京には斜線制限と日影制限とBBQ制限があるでしょっていわれて、やたらもくもくやったらもう必ず近所から苦情が出ちゃうって、やっぱり二拠点居住したって最大の理由はね、東京の中の家ではできないBBQがやりたい、今外からにおいがしてきてるから（笑）余計そう思うんだけど、BBQができる拠点をもつっていう願望はぼくにもありますね。



内野：もっともっとやりたいんですけども時間がきてしましまして今日はありがとうございました。最後に「フクシマトクシマの会」福島代表の辺見さんから、福島の声をおねがいできたらと思います。

#### 疑うこと省かないこと（再びフクシマから）

辺見：はい、本当にこれからですね、福島の復興は。おそらく何世代もかかります。だから福島地域会でよく話すのは、復興の次の世代の建築家、建築士をどう引っ張っていくかということで、地域によりかわりをもつ活動に導いていくことが重要であ

り、その魅力を直に感じてもらう取り組みです。たくさんの方があると思うんですよ。大三島の方法もあるし、いろいろな方法がある、そういうものをどんどんわれわれ先人が、きちつきちつと伝えて、プライドをちゃんと与えていく。銭金じゃなくて、生きていくというような価値をしっかりと伝えていくということかなと、いう風に思っています。

それと、福島から来てるんで、しっかり話してこいともいわれておりますので、さきほどいいましたようにですね、非常に「分断」が発生しております。原発による離婚も増えています。そして女性の35から40代の精神疾患が増えていると報告されています。それは、子育ての盛んなときに、地域を支えているのが、地域の主役がお母さんたちで、そのお母さんの居場所が奪われていて、それによって、精神的にダメージを受けている女性が増えていることが報告されています。福島の場合、岩手、宮城との違いなんですけど、船で沖に逃げて行った漁師が戻ってきて、家族全員が、波に奪われて、亡くなっているっていう方が、結構いらっしゃいます。それで海を憎むんですが、最終的には海とやはり共生することを選んでるんです。

じゃあ福島はどうかというとはですね、この原発と、それでも共生するって方はゼロです。そういうことでおきていることなのに、今までのプログラム、システムで復興しようとしていることにそもそも無理がある。ですから、二点あの一言いたいのは、やっぱりそのプログラムそのものをですね、ま、いってみりや社会システムっていうものを、疑ってかかること。四国もこれから、

津波が来て危ないというところで、たとえば、仮設という概念ですねが、一時避難の体育館公民館、そのつぎの仮設住宅、そのつぎに復興という、フローをいっそ疑ってみる。東北を見てもらえばわかるようにすでに成り立っていないんじゃないかと。いかに上質な木造仮設をつくるかといってるんですけど、じゃあ誰のために何のためになのかということをお我々は一番考えないといけない生業だと思ってるんですね、それは、立ち上がるためのもの、一日も早く立ち上がるためのプログラムであるはずなんですよ。であれば「仮設をやらない作らない」ということも考えの一つにくわえたらどうかという話を内野さんにしています。被災者が早く立ち上がるというときに、なんでもかんでも与える。良質な仮設住宅を作れば、中途半端に立ち上がることを殺されるてしまう、しかもそれはあくまで仮設という環境ということでもあります。

それから、エネルギーついてであります。伊東さんもおっしゃるように、エネルギーということに対して、ただ形を変えて、省エネ、っていうことで済ませていいのかということでもあります。私は福島復興住宅コンペで最初に訴えたのは、単なる省エネではなくて、本当の豊かさっていうのは、いかに多くのものを持っているかじゃなくて、いかに多くのものを必要としないか、というところにもともと日本の文化があつて。そこをどう今の時代に合わせて取り戻していくかということです。それは暮らしのあり方そのものです。原発のエネルギーは省略という文字のために使われている。省略の表側の言葉は、便利、便利という言葉の裏に省略が隠されておまして、どん

どんどん省略をするっていうことにエネルギーを使っていく。

さっきの古谷さんの、協働です、祭りにしか残ってないと古谷さんおっしゃったように、もっと、もっともっとやったほうが楽しい、省略しないで、そこはどんどんやっぱり、動きましようとかですね、先ほどのリヤカーや一輪車でひっぱる、あれもまさにそうだよっぱり省略しない、それこそ豊かだということをお考えられるのがわれわれの生業じゃないかと思っておりますので、まさにそういうところを、しっかりそのプログラムを疑ってかかってですね、どんどん提案をして、経済至上主義じゃなくて、すべての原点をお経済におくんじゃないかですね、違うんだということをおやっぱりしっかりわれわれは見つめ、そして新しい、世代に、きちっと申し伝えて、しかも魅力的にする、ということをお、考えていかないといけないと思っております。

内野：ありがとうございます。なにか、引き続き皆さん方のなかで考えていくその種のようなものが、もし見つかったとすれば幸いだと思っております。辺見さん、伊東さん、古谷さん、どうもありがとうございました。



(司会・文責 内野輝明 2015/5/16)